

特

集

子どもと動き

## 遊びの中で、動きが生まれる

宮里 暁美

子どもたちは、幼稚園で過ごす時間の中で、ゆっくりと自分の遊びを展開していきます。子どもたちの遊びはさまざまです。じつと何かに集中している子どもたちもいれば、走ったり駆け下りたりなど活発に体を動かしている子どもたちもいます。

同じ一人の子でも、座り込んで何かを作っていたかと思うと、次に見た時には全力疾走していたりします。集中した状態（静）から躍動した状態（動）へと子どもの遊びが急に移ると、そのような子ども

たちの姿を見て、落ち着きがない、集中力不足などと否定的にとらえられる場合もあります。

落ち着きがなく動き回ってしまったという場合ももちろんありますが、そればかりではないと思います。子どもたちの遊びは、よく見ていないと展開が脈絡のないもののように見えてしまうということがあるのではないのでしょうか。

子どもたちは、遊びの中で次から次へと動きを引き起こしています。そこには、どのような脈

絡があるのでしょいか。秋の一日、園庭で色水作りをしていた子どもたちの姿を通して考えてみたいと思います。

### シェイクしながら色水作り

秋の園庭でのことです。外に置いたテーブルの所で、年長組のA子たち五、六人が、ペットボトルに赤い実と水をたっぷり入れて、色水を作り始めていました。

赤い実を指先でつぶしてはペットボトルに入れ、水を加えていきます。透明な水がほんのりと赤くなっていく様子を見て、子どもたちは「あ！赤くなってきた！」「きれい！」とうれしそうに話しています。

そのうち、A子がペットボトルを振り始めました。薄いピンク色に染まった色水がペットボトルの中で踊っています。それを見て、T子たちも同じよ

うに振り始めました。A子たちは、顔を見合わせてペットボトルを振りながら「シェイク！シェイク！」と掛け声をかけているうちに楽しさが広がり、体も弾んできたようです。ピョンピョンとジャンプしていたかと思うと、一人を先頭にして一列に並んで走り出しました。(次ページ写真①)

ペットボトルを振りながら桜の木の周りを勢いよく何周も走る子どもたちの背中で、木漏れ日がキラキラと踊っていました。(写真②)

グルグル、グルグル、何周も走ったその後に、先頭を走っていたT子が「ストップ！」と掛け声をかけました。その合図でみんながピタリと止まりました。何周も走っていたので少し息を切らせながら、子どもたちは手に持っているペットボトルを「ほら！」と言いながら見せ合いました。そこには、見事に泡立ったきれいな色水ができあがっていました。(写真③)



▲写真1：並んで走る



▲写真2：桜の木の周りを走る



▲写真3：「ほら、見て！」

それぞれに泡立ち方も少しずつ違い、それを見比べるのも楽しいようです。

「このところがきれいでしょ」「もつとアワアワにする?」と話していた子どもたちは、誰かが「シェイク!」と言いながら思い切りペットボトルを振り始めた動きをきっかけに、一斉にペットボトルを振り始め、また、勢いよく走り始めていきました。

### 一人の動きがみんなの動きに広がって

私は、この遊びの一部始終を、色水作りの新しい工法を目撃したような面白さに包まれながら見つめていました。世界のどこかでは、このような方法でジュースを作っている人たちがいてもおかしくないのではないかと、一人空想を巡らせていました。

そして、保育後に子どもたちの遊びの様子を、プロセスを追いながらゆっくり振り返って考える中で、子どもたちの動きがどのようにして生み出されたのかが見えてきました。

子どもたちの遊び始めは色水作りでした。色水作りをしていた子どもたちは、テーブルの周りに立ち、水に色がついていく様子をじっと見ていました。わずかな色の変化も見逃さないというまなざしがあるにはありました。子どもたちの言葉数も少なく、静かに集中している雰囲気のみなぎっていました。そのような状況に変化が生じたのは、A子の「シェイク！」という言葉と動きがきっかけでした。

A子がペットボトルを振り始めた理由は何だったのでしょうか。ペットボトルを振ると実が踊るように揺れるのを見て興味をもったのかしれません。そのようにして振っている間に、色水の色が濃くなってきたり、泡立ってきたりという変化に気づき、さ

らに振ってみようという気持ちになっていったのではないかと考えます。

『シェイク』の動きは、あつという間に子どもたちの中に広がっていきました。一人で振っていた時よりも、みんなで声を合わせて振っている時のほうが楽しいと子どもたちは感じたのでしよう。そして「きれいな色水ができてきた！」といううれしい気持ちで友達との中でさらに大きく広がって、『ジャンプ』が始まったのではないかと思います。

友達と一緒にジャンプをしているうちにジャンプのリズムが高まり、次には『走り出す』という動きになっていきました。A子たちのいた場所は、大きな桜の木のそばでしたから、自然にグルグルと木の周りを回る走り方になっていきました。

『走る』という行為でも、まっすぐ走ると木の周りを回りながら走るのでは、体験は大きく違っています。『グルグル回る』中で、互いの走る姿も見な

がら、もつともつとという気持ちを高めて、笑いが生じていきました。走るスピードに加速がつき、笑いも大きくなっていきました。

みんなで走るからうれしくなり笑顔がはじける。体と心が一体となった子どもたちの遊びは、このようにして広がっていったのではないかと考えます。

何周も走った子どもたちは、誰かの『ストップ』の合図で止まり、息を切らせながら互いのペットボトルを見せ合い、そしてしばらくすると、またシェイクをし始め、走り出すという繰り返しを楽しんでいきました。

### それぞれの動きのつながりと要因

『シェイク』『ジャンプ』『走り出す』『グルグル回り』『ストップ』という五つの動きのつながりや動きが生み出された要因を考えてみます。

『シェイク』『ジャンプ』『走り出す』という一連の動

きは、遊びの楽しさを共感し合う友達存在によって導き出されました。そして一人の子どもが始めた動きが共感をもって友達に伝わり、みんなの動きになる中で、動きのリズムが高まり、さらに大きな動きになっていく。うねりのような動きの中に、子どもたちの遊びの楽しさは潜んでいるのだと考えます。

『走り出す』動きが『グルグル回り』に転じたのは、大きな桜の木が存在がかわっています。枝を大きく広げた桜の木の周辺は、この時期、葉が茂りとても気持ちのよい木陰になっていました。子どもたちが、そのような桜の木のそばで遊び始めたのは単なる偶然ではないと思います。子どもたちは遊ぶ場所に対してとても敏感です。「ここで遊びたい」という思いを共通にもっていたからこそ、桜の木の周りで遊んだのではないかと思います。

友達と心を通わせて遊ぶ経験を重ねた子どもたちは、楽しさを共有し、互いの動きに共鳴しながら楽

しさを膨らませていきます。楽しさが広がりすぎて遊びが崩壊してしまいう時もあります。この遊びの場合は、そうはなりませんでした。

遊びの楽しさでつながっている子どもたちは、ちようどよい加減のところで、『ストップ』をかけました。『ストップ』によって遊びに一区切りがつき、自分たちの遊びの楽しさを確かめ合う時間をもつことができました。だからこそ、次にまた遊びを始めることができる。ストップには大きな意味があるのだと気づかされます。

### 「静」と「動」をゆるやかに行き来する環境

T子の『ストップ』の合図で「止まった」子どもたちは、しばらくすると誰かが「シェイク」を始めたことをきっかけに再び走り始めました。このように、子どもたちは自分たちで「静」と「動」を調整して遊びをつくり出しています。だからこそ、子ど

もたちの遊び空間は、「静」と「動」をゆるやかに行き来できる状態にしていきたいと思えます。閉じられた空間よりも、広がりへとつながっている空間の中で、子どもたちは豊かな遊びを展開していきます。

子どもたちののびやかな動きを引き出す上で、子どもたちの姿をしつかりととらえ、子どもたちが味わっている楽しさに共感する保育者のかかわりは、とても大切です。「静」と「動」を調整しながらつくり出されている子どもたちの遊びを理解するためには、子どもたちと一緒にジャンプしたり駆け回ったりして、同じ風を感じ、同じ景色を見ることが必要になります。子どもたちは体で遊んでいます。子どもたちが感じている楽しさを、保育者自身も体を動かして十分に味わった時、初めて、子どもたちの遊びを支える援助を考え出せるのだと思います。

(お茶の水女子大学附属幼稚園副園長)